

国外研究員ヨーロッパ滞在記

森 田 善 久
Yoshihisa MORITA

理工学部数理情報学科 教授
Professor, Department of Applied Mathematics and Informatics



第Ⅱ部 パリ・オルセー編

第Ⅰ章 ローザンヌ滞在の補足

前回のⅠ部で書かなかったローザンヌ滞在中で印象に残っていることをいくつか補足として書いておきたい。スイスの学校は土日に加え水曜日にも休みである。高校までは週休3日になる（あとで知ったがフランスもそうである）。水曜と土曜の朝は、大きな広場周辺でマルシェが開かれる。一方、日曜日は全てのマーケットがお休みになる（駅構内にある小さなマーケットとパン屋さんは日曜でも開いていることを見つけてからはよくお世話になった）。レストランも開いている店はごく少なく、開いていてもお昼だけの場合や高給ホテルにあるような少し値の張るレストランになる。夏の盛りを迎える頃には、オープンのお店も少しは増える。ジュネーブのような大きな街では駅周辺で開いているレストランもかなりあるが、ローザンヌ近辺はやはり不便であった。月曜が休日になる場合や、週末に遅くまで外出するときは、金曜日に買い物をしっかりしておかないと休み明けに不便することになる。いずれにせよ日本と比べると休みが多いし、デパートなどの閉店時間も早い。

6月の中頃から天気の良い日が続くようになる

と、スイスの魅力がよくわかってくる。ちょっと足を延ばすとハイキングに適切な場所が多数あり、また高山鉄道のような急斜面を上って行くパノラマ列車が色々な駅から出ている。アウトドアが好きな人にはたまらないだろうと想像できる。もともとアウトドア派でもなく、スイス自体にそれほど興味を持っていたわけではないが、魅力的であった。残念ながら休日にハイキングを楽しむ間もなく滞在を終えることになってしまったが、将来また短い期間でもいいから旅行に来たいと強く思える国である。

スイスの料理で有名なチーズフォンデュやラクレットはどこでも食べられる訳でなく、特にラクレットはローザンヌのレストランで食べる機会がなかった。チーズというと赤ワインというイメージを持っている方も多いが、白ワインに合うチーズも多数あり、特にグリュイエールは白ワインにぴったりである。実際、チーズフォンデュを作るときにこのグリュイエールはよく使われ、白ワインでチーズを煮込む。

アパートはいずれも食器家具付きで、2つ目のアパートに引っ越すときに担当者がリストを元に全て揃っているかチェックしてくれた。そのときいくつか細かいところで不備な点があったので、それは補充・補強してくれることになったが対応の遅さにあ

されることも多い。しかし、後でフランスを経験するとスイスは結構親切で、遅いがきちっとやってくれていたな、という印象に変わった。

向こうでは銀行口座も開いたが、滞在許可証とアパートの契約書のコピーがあればすぐに口座を開けてくれ、キャッシュカードが郵送されてくる。口座の維持費がかかるので結局口座を閉めることにしたが、手続きは簡単である。せっかくスイスで口座を開いたのにもったいないとよく言われるが、口座の維持費も積もってくると結構な負担になる。

この章の終わりにフランス語について触れておく。大抵は英語でも通じるが、役所から送られてくる公的な文章はフランス語である。最初はただで恐れをなしていたが、ネットの自動翻訳や辞書を使えば1ページくらいの書類なら何かが書いてあるか、大体想像できるようになった（込み入った内容になるとお手上げであるが）。

第2章 パリへの移動準備

スイスでの生活に慣れてくるに従って、しかも気候の良い夏を過ごしているとフランスに移動するのが少し億劫な気分になってくる。住む国を変えるためにはビザの取得という難関も待っている。日本を発つ前に大方の書類は揃えていたが、移住するパリのアパートはまだ決めていなかった。フランスでのホスト役の教授はパリの郊外にあるオルセーという町の近くに住んでいる。郊外線ですり市内からは40分かかる場所である。オルセーは美術館にもその名前があるが、美術館の名前はオルセー行きの列車が出ていた駅舎を改造したためにその名前がついたので全く違う場所である。オルセー近くならホストの方でアパートを世話してもらえたかもしれないが、滞在も長いので、買い物に便利なパリ市内にすることに決めた。そのため自分達でなんとかしなければならない。若いときなら手間をかけてでも手頃なアパートを探そうと思ったかもしれないが、結局はパリの不動産屋と取引のあるフランス語学校に頼んで探してもらうことにした。スイスのアパートは

狭かったので、条件として寝室が別にあること、治安が良いことを希望として伝え、候補をあげてもらうことになった。ビザの申請は3ヶ月前になる6月初めには申請ができるが、パリで住む場所を証明する契約書のコピーが申請時に要求されるので早めに決めたい。しかし、中々連絡がない。曰く1月くらい前になると多数出てくるので、焦らずもう少し待つよう言われた。そうこうしているうちに6月末くらいに急にリストが送られて来て、そこから何点か順位をつけて選ぶようにという指示があった。アパート選びの条件としては広さに加え、スイスでの経験でバスとエレベーター有りの条件をつけると選択肢はほとんどなく、場所もよかった7区のアパートを1番目にしたところ、すぐに話がまとまった。その時点でその部屋はすでに空いていたので、2ヶ月後に入る我々は難しいと思っていたが以外にもすぐ決まった。後でその理由がわかる。何れにせよアパートが決まったので、あとはビザを申請するだけである。

日本を出る前は首都のベルンにある大使館で申請すると思い込んでいたが、ジュネーブのフランス総領事館でもできることがわかり、予約を入れることにした。そこでも小さい難題があったが、長くなるので説明は省く。とにかく電話で予約を入れて申請書類を一式持参してジュネーブに向かった。1週間くらいしてから、申請がおりたのもう一度訪問するようにという連絡をメールでもらい、もう一度ジュネーブに行く。ビザに加えパリに入国してからの手続きについての説明をもらった。ビザがあってもフランスに入国してから3ヶ月以内に滞在許可証を発行してもらう必要がある。

パリについて少し落ち着いた1週間後くらいに書類一式を郵便で送ると、9月の末にメールが来て、指定の日（10月の第1週目）にバスティーユにある管轄の役所を訪問して手続きをした。所定の場所にハンコを押す簡単な手続きである。ややこしかったのは、妻の場合である。シテ島にある警察署に申請する必要がある、また滞在許可証が下りるのにす

ごく時間がかかった。

第3章 ローザンヌからパリへ

日本からの移動も数えると3回目の移動（引越し）である。ローザンヌから列車で乗り換え無しでジュネーブ空港まで50分ほどで移動できる。ジュネーブとパリ間はフライトで1時間程度である。問題は荷物である。3箱をローザンヌのアパートの最寄りの郵便局から送ることにした。パリのアパートに直接送るのはトラブルの可能性があるので勧められないという不動産斡旋の担当者の助言を受けて、ホストの家に送って預かってもらうことにした。アパートへの入居が落ちついてから、4回に分けてホストの自宅からアパートに運ぶことになる。

8月30日にアパートを引き渡し、その日はローザンヌ駅近くのホテルに1泊して、翌日の31日の朝にホテルを出た。荷物は大変であったが、空港まで着いてしまえば一息つける。不動産会社の担当者から引越した日に入居できるという連絡があったが、念のためアパートに近い場所にホテルを確保しておいた。パリの空港からホテルに移動して荷物をホテルに置いた後、午後4時にアパートの前でBenjaminという担当者を待つ。少し遅れてやって来て暗証番号で門を開けてもらおうと、中庭に入り、



写真1 アパートから見た中庭

中庭に面した建物の角にある出入り口の扉をキーで開けてもらい、エレベータで5階まで上がる。部屋は広くりビングからは中庭が見え、寝室から向かいの建物と、待ち合わせていた通りが見下ろせた。

古い建物（100年少し経っているらしい）で雰囲気がある。部屋の天井も高いので実際より広く見える。この時に色々と説明を（英語で）受けたが、彼の様子を見ると、彼も初めてこの部屋に入ったようで、説明書を何度も見ながら我々に説明する。バスルームを見ると、バスタブの横に穴が空いていて外から蓋をしないでそのままになっており、修理後の処理ができていなかった。後でわかったが下の階で水漏れがあったようで、それを修理した後だった。その箇所は後ですぐ綺麗にすると言ってくれたが、結局この後始末も（日本人の感覚では）すぐにしてもらえなかった。この部屋が3ヶ月くらい空いていたのは修理のためだったのである。一応全てチェックした後、不備な点は対処してくれると言ってくれたが、その後、1週間くらいで彼はこの会社を辞め担当が別な者になったことを聞いたときは思わず絶句である。

Benjamin が去った後、部屋の至る所に埃が残っていたので早速掃除に取りかかる。一通り掃除が済んだあと、寝室のクローゼットにあった掛け布団に新しく用意してあったカバーをかけようとしたら、布団に血糊が残っていた。すぐにメールして新しいのに取り替えるよう依頼した。その日は部屋で寝る気がしなく、ホテルを確保しておいてつくづくよかった。次の日、もう一つの小さい掛け布団があったのでそれを使い、2日後に使いの者が新しいのを持って来たのでこの問題は解決した。しかし、バスルームの修理など多数の未解決の問題が横たわっており、新しい担当者とやり取りしながら、1ヶ月くらいは事案を抱えたままで落ち着かなかった。しかも、こちらの部屋では問題なかったが、水漏れが下の階で再び発生したようで、我々のバスルームのバスタブ周りの修理が必要になった。下の階でなかったよかった、と慰めるしかない。いずれにせよ、全

て落ち着くのに2ヶ月くらいかかっている。

なお、スタッフに日本人がいたが部屋のトラブルの件については担当違いということで、ほとんど頼りにならなかった。

第4章 パリでの生活

アパートには色々と問題があったが、住まいの周辺は環境が良くセーヌ川に出るのも近い。ロダン美

術館、オランジュ美術館は歩いて20分～30分の場所にあり、もう少し行くとオルセー美術館もある。逆の方に歩くと20分くらいでエッフェル塔の近くまでいける。

アパートの前の細いシュルクフ通り（Rue Surcouf）は、セーヌ川にかかるアンヴァリッド橋につながるトゥール＝モーブール通り（Boulevard de la Tour-Maubourg）とすぐ平行に走っており、エッフェル塔近くのブルドネ通り（Avenue de la Bourdonnais）の間をつなぐサン＝ドミニク通り（Rue Saint-Dominique）とぶつかっている。そのサン＝ドミニク通りはおしゃれな店が多かった。カフェやレストランだけでなく、ケーキ屋さんやブティックもたくさんあり、エッフェル塔方向に歩くとボスケ通り（Avenue Bosquet）の手前でクレ通り（Rue Cler）と出くわす（アパート周辺地図を参照）。この通りはモット＝ピケ通り（Avenue de la Motte-Picquet）まで延びており、下っていくとマルシュのように両側に食料品店が並んでいる。新鮮なお肉の店、野菜・果物屋さん、チーズの専門店など、食材や食料品に関してはここでほとんどすべて買い物できる。特に、新鮮な魚介類を扱っている店を見つけた時は小躍り



写真2 エッフェル塔



アパート周辺地図



写真3 チーズの専門店

した。肉を毎日では辛いので、この店には随分助けられた。

パリは美食の街と呼ばれるだけあって食材は豊富である。日本では容易に手に入らない食材や、手に入っても高価なものが比較的安く買えた。スイスもチーズが美味しく、よく買っていたが、パリはその種類が圧倒的に多く日本で買うよりずっと安い。店に入っても買うのに迷ってしまう。あまり買い過ぎるとすぐには食べきれないので冷蔵庫がチーズの匂いで臭くなる。帰国してからも、安くて果汁たっぷりのレモン、新鮮なラム肉、赤身の牛肉、牡蠣、ラ・フランスなどが恋しい。

さて、移動はもっぱら歩きとメトロ（地下鉄）であった。随分と後になったが、慣れて来た頃にはバスも使えるようになった。メトロ、バス、RER 郊外線で共通に使えるパスを購入し、1ヶ月、あるいは1週間毎にチャージをして使う。ここでパリのメトロについて触れておく。パリ市内を14本のラインが走っている。14号線は比較的新しく扉も自動開閉である。1号線もそうだったので番号の小さい方からリニューアルをしているようである。よく使う6号線はまだ古いタイプであった。メトロは移動には便利だがスリに出会う機会も多い。特に、オペラ座界限などの観光客の多いところや大きな駅周辺はスリの稼ぎ場である。こちらに滞在中にテロのことを心配してくれるメールを日本からよくもらった。確かに主要なメトロの駅では自動小銃を持った

警備員によく出くわし、テロは身近な問題であることを実感するが、それよりもスリの方に出会う確率の方が高い。命とは比較にはならないが、大事なものを取られたときのショックも大きいのでスリには要注意である。

ところでサン=ドミニク通りはおしゃれな店が多いと述べたが、一つだけ困ることがあった。歩道が狭いのによく犬の〇〇〇が落ちているのである。踏んづけて引きずった後の2次災害を被ることもあり油断できない。他の地区ではこれほど頻繁に出くわすことがなかった。一説に依ると、この辺りは裕福で犬を飼っている住人が多いからだということである。犬を飼っていても後始末をすれば良いのでモラルの問題である。確かに犬を飼って散歩している人たちをよく見るが、犬の後始末をしている現場を見たのは滞在中2回だけであった（散歩の時間帯でなかったかもしれない）。

第5章 オルセーと研究活動

オルセーにあるパリ南大学のキャンパスに行くには、最寄りの地下鉄の駅アンヴァリッド (Invalides) から8番線でモンパルナス駅 (Gare-Montparnasse) まで行き、6番線に乗り換えてダンフェール・ロシュロー (Denfert-Rochereau) でRERのB線に乗り換えてOrsay-Villeまで行く方法と、RERのA線のアンヴァリッドからサン=ミッシェル=ノートルムでRERのB線に乗り換える方法がある。一長一短があったが、主に前者を使った。サン=ミッシェル=ノートルム近辺や、ダンフェール・ロシュローの周辺の朝夕のラッシュには悩まされることも多かった。列車がオルセーの駅 (Orsay-Ville) に近づいて来ると、写真にでも出てきそうな郊外の街並みが現れ、小ざれいな住宅地が広がって来る。オルセーの駅から大学のキャンパスは近いが、キャンパス内は森のように緑が多く、数学科の建物までは早足で歩いても駅からは10分以上かかる。しかも急勾配の箇所もあり結構な運動になる。このおかげで帰国後は、それほど長くない坂なら急な坂でも苦にならなくな

った。

オフィスは最初、数学科の建物の1階に用意してもらっていたが、別棟にあるホストのオフィスのすぐ近くにあるポストドク用のオフィスにすぐ移動した。机が一つ余っていて、ホストに雇われているポストドクの Elias Jan がこのオフィスを使っていたので、彼を含めて3名のポストドクの仲間入りすることになった。若い人たちと一緒にオフィスを共有するのは、この年になると新鮮な経験である。Jan さんには色々助けてもらった。ホストの Hilhorst は海外からの留学生を積極的に採用していて、博士課程の学生とポストドクを合わせて数名抱えていた。お昼頃に研究室に来て、ランチを皆とカフェテリアでとり、時間があれば70セントのエスプレッソを研究室に近い別のカフェで何人かで飲んだ後、仕事にとりかかるという日課である。学生とポストドクとの指導や共同研究に追われ、中々こちらと議論する時間ができない。そのため研究は自由にでき気楽なのだが、せっかくなので一番テーマ的にも私の専門に近かった Jan さんとホストの共同研究に参加させてもらい、色々議論することになった。

Jan さんから自分の持っていない知識を吸収しようという熱心さが伝わり、こちらにも刺激を受ける。彼はスロバキア出身でプラハのチャールズ大学で修士課程を修了した後に、パリ第6大学の博士後期課程に入りそこで学位を取った後、オルセーに移動し Hilhorst 教授のもとで数理生物の問題に取り組んでいた。彼のポジションの期限が翌年の8月末までだったので、暮れ頃から新しいポジションを求めて本格的に就職活動をしていた。彼は結婚しており12月に娘さんも生まれ、喜びの反面、中々新しいポジションが決まらずプレッシャーを感じていたようだ。翌年(2017年)の2月に無事オーストリアのグラーツ大学に5年間のポストドクのポジションが決まり、わたしが帰国後の6月にオーストリアに移動した。

少し先走ったので、パリに移ったばかりの9月に戻る。9月12日~16日にポーランドで開催された

研究集会に招待され、始めてポーランドを訪れた。パリからワルシャワを経由してボズナンという町にある空港に到着した。そこから用意されたバスでベッドレボ(Bedlewo)という場所にある数学の研究所に1時間ほどかかって、連れて行かれた。周辺は何もない隔離された場所であったが、研究に集中するには良い環境である。研究所は、池のある森のような大きな庭で囲まれており、気分展開に散歩もできる。一つ困ったことは、蚊が多かったことである。知らないで窓を開けたままにしたところ、安眠のために蚊と長時間格闘する羽目になる。ところで半日だけボズナンをエクスカッションで観光する機会があった。旧市街地は歴史を感じさせる美しい街で講演の合間のリラックスした時間を過ごせた。

パリに戻ってから2日ほどして、今度は南仏のフレジユス(Fréjus)という場所で開催された研究集会に参加するためにパリからニース行きの便に乗った。ニース空港に着くと、手配された大きめのタクシーに何人かで乗り込み、目的地に着くの1時間半くらいかかったであろうか。ここの集会も周辺から孤立していて残念ながら海からも少し離れていた。いずれにせよ、このような場所で合宿のような研究会をすると、初めての参加者と話をする機会が増え交流を深めるのに都合が良い。この時、ボルドー大学から参加していた教授と話をする機会があり、ボルドー大学で彼がオーガナイズする10月のセミナーに呼ばれることになった。



写真4 ポズナンの街の広場



写真5 ボルドーの街の広場でくつろぐ人々

10月に入ると日もかなり短くなり肌寒い日も多くなる。10月12日にパリからボルドーまでTGVで移動し、旧市街地の一角にあるホテルに宿泊し次の日の午後にセミナーで講演した。ボルドーはワインでも有名であるが、歴史のある都市で、旧市街地の雰囲気はパリよりさらに歴史を感じさせる。ガロンヌ川河口の港町として発展してきた。市内の歴史地区は世界遺産に登録されている。暑い夏を除くと、パリよりは温暖で過ごしやすい。残念ながら今回はボルドーのワイナリーを訪れる時間もなかったが、いつかのんびりとこのような場所に旅行できると嬉しい。

11月には、上海で華東師範大学のXingbin Pan教授と日中交流の若手研究者のワークショップを企画していたので、深夜にパリを出る上海行きの便に搭乗する。日本から招待した若手の研究者6名と上海で合流し、5日間ほど上海で滞在した後、台北で開催されたJ.-S. Guo教授の還暦祝いの研究集会に参加するため移動した。上海はパリほど寒くなかったが風が思ったより強く、また台北に着くと30度まで気温が上がり、すっかり体調を崩してしまった。台湾での滞在は短かったが、パリに戻る深夜便は長く、体を休ませるため機内ではひたすら寝ていた。パリに戻ってからは3日間静養して体調の回復を待った。海外で体調を崩すと大変である。温度差が大きいと特に注意が必要である。

第6章 クリスマスから新年にかけて

ちょっと研究活動から外れてパリでの生活に戻る。10月の最後の日曜日に夏時間から冬時間へ変わる。時計が1時間進み、日の入りが早くなって冬が近いことを実感する。この年は11月の後半から冷え込みが強くなった。12月に入るとクリスマスを迎えて街のネオンや飾りが増える。サン=ドミニク通やクレ通りもクリスマスの飾りが増え、週末は人で賑わう。夜のシャンゼリゼ通りも街路樹がネオンの灯で輝いていた。

イブが近づくと、人気のレストランは早くから予約しないと中々席が確保できない。また、食料品では鶏の塊や、ロブスター、牡蠣などが増える。それにシャンパンも多数出回り、通常より値引きされる。とにかくイブのあたりから新年にかけては夜遅くまでパリの人達は楽しんでいるようだったが、冷え込むので早々にアパートに戻って、買い込んだ材料で料理を楽しんだりすることの方が多かった。イブの夜にもう一度シャンゼリゼ通りに出向くと、白バイの隊列の中にサイドカーに乗ったサンタが目の前を通り過ぎ、沿道は盛り上がっていた。しかし早めに切り上げてアパートに戻ったので、その後さらに盛り上がりがあったかどうかかわからずじまいである。凱旋門の辺りで打ち上げられた新年の花火も見損なった。

第7章 新しい出会い

12月12日にパリ第6大学の数理生物ラボのセミナーに呼ばれて講演した。この時、聴衆に日本人らしい雰囲気の人物がいることに気が付いたが、講演終了後に話しかけてきた。この方は県立兵庫大学シミュレーション学研究科の准教授で、サバティカルを利用して9月からこちらの研究室に来ていたのである。かなり長時間廊下で立ち話をしたあとでメールアドレスを交換した。そのあと、Hilhorst教授と相談して年明けの1月にセミナーをオルセーで企画し、そこで講演して頂いた。彼とは2月にもパリのオデオン(Odeon)で夕食を一緒にとった。奥さん

とお子さん2人を連れて家族でパリに1年間の予定で来ているということを話してくれた。彼は40歳くらいで私との年齢差は結構あるが、牡蠣を肴に白ワインを飲みながら共通の知り合いの話などして楽しんだ。3月には、彼の大学時代の同窓でパリに1年前から留学に来ているトヨタの研究開発部門に勤めている方も交えて一緒に食事した。

少し遡るが10月に妻の通っていた京都にあるフランス語学校の塾長（フランス人）が企画する夕食会があった。サン=ジェルマン=デ=プレで待ち合わせをしてピザを一緒に食べに行くという計画である。これに妻と一緒に参加した時、滋賀県にあるお隣の大学でフランス語を教えている准教授の方が奥さんと一緒に参加していた。レストランでの席が向かい合わせになったので少し話をしたが、9月から1年間サバティカルでパリに来ていることがわかった。若い時にパリ第8大学の大学院に留学しそこで博士号をとった経歴の持ち主で、フランス語はペラペラである。この夕食会の後、奥さん同士はラインで連絡を取りあっていたが、帰国をひと月前に控えた2月に4人で再開し一緒に食事をした。この時、妻達がたまたま関わることになった（日本人スタッフのいる）病院の担当医の悪口の話で盛り上がった。

よくあることかもしれないが、海外で初めてあった日本人と共通の何かを通して親しくなることがある。これも貴重な体験である。

第8章 帰国に向けて

2月の中頃になるとやっと穏やかな気温の日も増え、日も少しずつ長くなり春が近いことを実感できるようになる。一方、3月の帰国の日が近づくにつれ、最後となる引越しの準備を進めていく必要があった。長期生活するのと、短期間の旅行で滞在するのでは全く意識が異なる。旅行の場合は単に色々な観光地や催し物を楽しめば良いが、長期生活だと落ち着いた時間を持てる一方で生活サイクルができるので、観光で来ているような気分にはなれない。



写真6 夕暮れのアンヴァリッド

例えば、京都に住む人より観光でよく訪れる人の方が、京都の有名な寺社や観光の穴場を知っているということはよくあることである。一方で、生活して初めて体験できる風景もある。オルセーからの帰りにメトロの最寄り駅アンヴァリッドから地上に上がった時、左正面に見える堂々たるアンヴァリッドの建物（ナポレオンが眠る）と、その目の前に広がる大きな公園の樹木の向こうの遠くに見えるエッフェル塔の姿は何度も見たが、しばし帰宅の疲れが癒された。忘れられない光景として記憶に残っている。

これから日がさらに長くなり暖くなる時期に帰国を迎えるのは残念な気持ちもあったが、最後の大仕事を控え早めに帰国モードに切り替えて準備することにした。

第9章 おわりに

スイス（ローザンヌ）5ヶ月とフランス（パリ・オルセー）7ヶ月の研究員生活であったが、よかったことも大変だったこともあった。もし、もう一度行きたいかと聞かれれば、行きたいと答えるが、同じような生活は無理な気がする。大変さもわかってしまうと、同じことは経験したくないと思うのが人情であろう。できれば別な形態でいいからまた行ければと思う。

この原稿を書きながら1年前の自分の生活を思い出すと嘘のような環境である。熱い湯がすぐ出なくなるパリのアパートのお風呂の給湯設備や、フュー

ズのよく飛ぶ電気設備，異常に高いコピーサービスなど，色々な悩まされたことを思い出すとつくづく日本は便利な国であると思う．スリの心配もする必要がない．ただ，便利なことが必ずしも幸福であるとは限らない．過剰な便利さが身の回りに溢れているような気もする．文化の違いを生活から感じる事ができた貴重な体験であった．

研究については長期に渡って集中できる時間が持てたことは，もちろん直接的に大きなプラスになっており，1年間の滞在中に論文も数編完成できた．また，フランスは解析分野では伝統があり世界的にリードしているが，数理生物分野で活躍する若手も増えていることが実感でき有意義であった．最先端の手法が常に取り入れられながら研究がダイナミックに変化している印象である．

日本を発つ前に M2 の 1 名と M1 の 2 名の院生

を残して来た．M2 の森本晃平君とはメールのやり取りと，たまにスカイプで連絡を取り合いながら，最終的に頼んでおいた先生の助けもあり立派な修士論文の完成に至った．また，1年間海外に行くことを承知で私の研究室を希望してくれた M1 の臼井宏毅君と野田康矢君には，代わりの教員に困った時には相談に行くように指示しておいたが，帰国してから 2 人が予想を超える成長をしていたことがわかり嬉しかった．お世話になった先生方に心から感謝致します．

最後になったが，海外では食事で苦勞するものだが，幸いにも妻が料理好きであったことに大いに感謝したい．新しい食材に対する強い好奇心のおかげで 1 人ではとても経験できない豊かな食事の時間を共有できた．加えてフランス語が全くできない私の良き先生でもあった．

